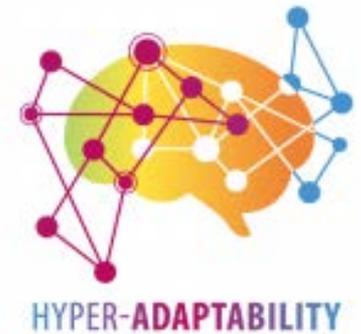




令和2年11月5日
第3回人工物工学コロキウム
「人・もの・社会の共存を目指す人工物工学」



人間と人工物とのありうべき関係 ～「主体性」を護り、かつ創造していくために～ (精神医学の立場から)

慶應義塾大学
医学部精神神経科
前田貴記

人間は生物としての生存環境である自然環境に適応しながら、人間という種どうしの社会環境を形成し、さらに人間ならではの言語的・文化的環境さらには、人工物による人工環境を生み出してきた。

人間は、自ら生み出してきた新たな人工環境への適応を、絶えず強いられ、さらにまた新たな人工環境を重層的に生み出し、適応を迫られ続けていくという無限に続く循環の中に生きている。

進化とも言えるが、果たしてそうであろうか？負の側面は？

- 自然環境
- 人間環境・社会環境
- 言語的・文化的環境
- 人工環境

人工物

情報通信技術

(ICT: information and communication technology)

山本夏彦

「何用あって、月の世界へ。」

人工環境における“一次経験”の消失

エーリッヒ・フロム（1900-1988） :精神分析学者・社会心理学者

「現代の科学技術は、もしそれが、これまでに比べて、少しでも能率がよくて、少しでも便利で、少しでも苦を減らし、快が多くなる技術が開発されると、それが人間の心にどういう影響を与えるかを全く問わないで商品化される。新しい商品が、新しい人工環境を形成していく。」

- 人工環境のために、“一次経験”（自然と出会ったときの直接的な経験）の機会が失われていく。
- 試行錯誤して工夫・努力する必要がなくなり、人間は無気力化する。

人工環境への強制的な適応

小此木啓吾（1930-2003）：精神科医・精神分析学者

『ケータイ・ネット人間の精神分析』（2000年）

- 人間は、自らが作り出した**人工環境**に、常に“適応”していくことが要請される。商品として人工物を生み出す企業と、一方的に人工物を与えられるユーザーとの間に、ニーズにおいて大きな乖離がある点が問題である。
- 個々のユーザーにとっては一方的に与えられた**人工環境**であって、ユーザー自身が望んで作り出した環境ではない。受動的な“適応”が強いられる構造となっている。

→人工環境への強いられた“適応”は、果たして望ましい“適応”といえるか？

「秘密（プライバシー）」の消滅 = 人間の固有性の消失、無価値化

土居健郎（1920-2009）：精神科医・精神分析学者

『表と裏』（1985年）

- 高度情報化社会によって、裸にされる人間。
- 近代個人主義によってプライベート領域は肥大化し、そして露出されるが、結局はプライバシーが侵害されることになる。
- 心に本来備わっている「**秘密性**」はどこまでも大切に守らねばならない。
「**秘密性**」は、各人の**固有性**を保証するものである。
- **心のあるべき姿、あるいは心の健康は、秘密を持っていられるということ。**
= 云うなれば無用の用であり、心の内的自由度、ゆとりのある状態・

- 「**秘密**」の消滅により、**他ならぬ私、すなわち固有の私ではなくなってしまう。**
- **個々の人間は、代替可能な一個の部品、商品となり、無価値化する。**

精神医学の立場からは
人工物の中でも、特にICTへの危惧がある
(もちろん期待もしている)

『主体性の精神医学—精神病理学と生物学とが重なるところ。』
精神医学, 61, 507-515, 2019.

「主体性」という主題は、およそ人間の営みを扱うあらゆる学問領域において、問題となり得るものである。この主題が古くなることはなく、時代時代において、常に新しい問題であり続けるものなのである。というのも、主体は環境と連関した一体のものであり、環境なき主体はあり得ず、また主体なき環境というものもあり得ず、人間の生きる環境が文明の進歩によって人工的なものへと変化していく限り、新たな人工環境に適応すべく、人間の「主体性」のありようも変化していかざるを得ないからである。

特に、現代は、デジタル革命と言われた第三次産業革命で発展した情報通信技術(information and communication technology: ICT)によって、人間の身体内部から生活空間、さらには世界全体の隅々までが高速かつ緊密にネットワーク化されるという第四次産業革命の真只中にあり、

人間はこれまでに経験したことがないような、いわば“繋がり過ぎ”の人工環境の中で生きつつある。結果、見えないはずの未来を予測かつ制御することに腐心し、そして身体から離れた遠い世界を支配しなければと、もがいている。

このような人工環境の中で体験される現実とは、“physical-world”の法則・価値基準よりも、“cyber-world”の法則・価値基準のほうが優位になっており、人間が身体感覚的に理解できるような現実ではなくなってきた。もちろん繋がることは、けっして悪いことではないが、“cyber-world”の法則・価値基準に従って繋がっていることが問題なのであって、人間の素朴な生にとっては適応することがなかなか難しい人工環境となっており、ICTへの依存に伴い、「主体性」の弱化が危惧される。

このように、「主体性」という主題は、常に新しい人工環境が生まれ、日々めまぐるしく変化している現代においてこそ、極めて重大な問題として、浮かび上がってきているのである。

【今後、精神医学が、学際的に取り組みたいこと】

ICTによる“繋がり過ぎ”の人工環境において、
弱化するであろう「主体性」を、
そして特にその固有性をいかに護るか？

そんな折に
Covid19パンデミックの発生

【コロナ禍で生じているこころの問題】

精神医学の立場からすると、コロナ禍で生じている最も深刻な問題は、人と人との身体的な繋がりが制限されていることである。

感染防止のためには“physical distance”が最も確実な方法ではあり、ICTによる代替が進められているが、身体的な繋がりをなしに、人間どうしが、その“こころ”が真に繋がることはできるのでしょうか。

【問1】

人と人との繋がりはICTによって代替可能か？

Physical-worldにおける身体的な繋がりが制限され、代替として、ICTによって繋がることますます推し進められようとしているが、cyber-worldを経由して繋がる、あるいはcyber-worldにおける“身体なき世界”において、人間どうしが真に繋がることはできるのでしょうか？

【問2】

cyber-worldにおいて、あるいは介して
主体の固有の「場」を生み出すことはできるか？

とはいえ、単に狭く限定されたphysical-worldに生きていけばよいという極端なローカリゼーションに回帰することはできないであろうから(個人的には尊重している)、“physical distance”の中で、cyber-worldを介して、真に繋がるための智慧とICT&ロボティクス技術が求められてこよう。

その上で“physical distance”の中で、「主体性」を発揮していくための“固有の「場」(いわば“居場所”)”を創造していくことが重要な課題であるものとする。

cyber-worldという、身体のない、時間的空間的に限定されにくい(?)世界において、主体の固有な「場」というものを創造することは可能なのか???

【Future Direction】

cyber-worldを介して新たに創造された各人の固有な「場」において、人と人が出逢い、相互主体的に繋がり、お互いにとっての固有な「場」を創造し共生していけるように“新たな現実”への適応が成されることを期待したい。

そのために、工学の先生方の智慧と技術に期待しており、学際的に議論していければと思っております。

メンタルヘルスのセルフサポート のための人工物の利用

セルフ・ストレスマネジメント が求められる時代

The Mental Health Action Plan 2013-2020

by the WHO recommended

“the promotion of self-care, for instance, through the use of electronic and mobile health technologies”. But the technology is moving a lot faster than the science. Appropriate scientific studies on mental health applications is needed instead of applications without evidence.

(Nature 532: 20-23, 2016)

【東大人工物工学センター・NTTドコモとの産学連携研究】 スマートフォンを使ってストレス推定を行い フィードバックする技術の開発

- ストレスに対する“気づき”を促す
 - “セルフサポート”のための行動変容を促す
(cf.) ウェアラブル・デバイス
- 集中力
ウェルビーイング
認知症

スマートフォンを使用した メンタルヘルスにおいて大事なこと

- 企業などの管理側ではなく、あくまでもユーザーが主体的にセルフサポートを行えるようにすること。
- 企業による、社員管理に利用されないように。
あくまでもuser-centered systemであることが重要。

ご清聴ありがとうございました。